

木曾三川「Q&A」～皆さまからのお問い合わせより～

- 明治改修の総工事費（当時の価格で約974万円）は、政府が全負担したのか。外国からの援助があったのか。
- ヨハネス・デ・レイケ等のオランダ人は、政府が推薦した人が呼ばれたのか。
- 明治改ではどのような人が施工に従事したのでしょうか。（どのような組織で延べ従事者数はどのくらいか。）
- 宝暦治水の施工範囲が知りたい。
- 「道塚堤」の読み方が知りたい。
- 木曾三川流域には水防建築は存在していましたか。
- 明治改修で佐屋川を埋め立てた理由は何ですか。
- 揖斐川の舟運、特に三湊についての資料はありますか。
- 木曾川の名前の由来は何ですか。
- 濃尾平野についての資料はありますか。
（犬山城の地形に関するテレビ番組を見て、もう少し詳しく知りたい）

質問	明治改修の総工事費（当時の価格で約 9 7 4 万円）は、政府が全負担したのか。外国からの援助があったのか。
回答	政府（国）と県（愛知・岐阜・三重）の負担で施工され、外国からの資金援助はありませんでした。総工事費の 83.9%にあたる 817 万の国費が当てられました。
参考資料	①『木曽三川治水のあゆみ』木曽三川治水百年のあゆみ編集委員会/編 建設省地方整備局 1995 →P184 「工事費」 ②『KISSO Vol.65』財団法人河川環境財団/編 建設省中部地方整備局木曽川下流工事事務所 2008 →P9 予算額について https://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/KISSO/pdf/kisso-VOL65.pdf ③『木曽川改修工事』内務省土木局 1919（複製版：建設省木曽川下流工事々務所 1968） →P92～93 資料①の数字の基資料となっています。 ④『木曽川改修工事概要』内務省名古屋土木出張所 1911（複製版：建設省木曽川下流工事々務所 1968） →P99～100 資料③と内容的に大きな差異はないが、工事費・工事数量に少し差があります。 ⑤『木曽三川 歴史・文化の調査研究資料 明治改修完成百周年特別号 KISSO』国土交通省地方整備局木曽川下流河川事務所 2013 →この資料は、明治改修全般ついてまとめられています。 https://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/KISSO/pdf/kisso-VOLtokubetu.pdf
木曽川文庫 の所蔵	参考資料①～⑤

質問	ヨハニス・デ・レイケ等のオランダ人は、政府が推薦した人が呼ばれたのか。
回答	明治3（1870）年、政府（民部土木司）は、水利施設（治水や築港）のためにオランダから技師を招聘（しょうかん）することを決定し、当時、日本で働いていたオランダ人医師のA・F・ボードウィンに人選を依頼しました。その結果ファン・ドールンとリンドが日本政府に推薦され、明治5（1872）年に来日しました。翌年には、ドールンの推薦によるエッシャーとデ・レイケ及びチッセン、そしてデ・レイケの紹介によるアルンストの4名が招聘されました。
参考資料	①『KISSO Vol.36』財団法人河川環境管理財団/制 建設省中部地方建設局木曽川下流工事事務所 2000 →P7 「オランダ人技師団の招聘」 https://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/KISSO/pdf/kisso-VOL36.pdf ②『日本の川を甦らせた技師デ・レイケ』上林好之 草思社 1999 →P45 「ファン・ドールンの来日」オランダ人技術者の人選について記されています。 ③『蘭人工師エッセル 日本回想録』龍翔館（三国町郷土資料館）/編 福井県三国町 1990 →P38 エッシャーの回想録で、日本からの技師要請を耳にするも当初叶わず、翌年にファン・ドールからの誘いの手紙が来た事などが記されています。 ④『明治の国土開発史 ―近代土木技術の礎―』松浦茂樹 河相全次郎・鹿島出版会 1992 →P48～ 「オランダ人技術者の来日」 オランダ人招聘までの詳細が記載されています。 ⑤『日本の近代化とお雇い外国人』村松貞次郎（株）日立製作所 1995 →P58～ 「河川改修の土木技術」 ⑥『木曽三川 歴史・文化の調査研究資料 明治改修完成百周年特別号 KISSO』国土交通省地方整備局木曽川下流河川事務所 2013 →P74 この資料は、明治改修全般についてまとめられています。 https://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/KISSO/pdf/kisso-VOLtokubetu.pdf
木曽川文庫 の所蔵	参考資料①～⑥

質問	明治改修では、どのような人が施工に従事したのでしょうか。 (どのような組織で延べ従事者数はどのくらいか)
回答	各県の担当機関及び内務省の土木監督署の職員（土木監督局の組織の詳細は、参考資料①②）と人夫として地元の人が作業に従事しています。従事した人数については、具体的な数を記したものではありませんが、ほぼ人力のみでの工事ですので相当な人数であったと考えられます。
参考資料	①『木曽三川治水のあゆみ』木曽三川治水百年のあゆみ編集委員会/編 建設省中部地方建設局 1995 →P183 「工事施工の組織」 ②『船頭平閘門改築記念誌』財)河川環境管理財団/編 建設省中部地方建設局・木曽川下流工事事務所 2006 →P21～23 「工事施工の組織」 明治 11 (1878) 年、美濃国羽栗郡竹ヶ鼻村（現在の羽島市竹鼻町）に内務省木曽川土木局出張所が創設され、これが現在の中部地方整備局 木曽川下流河川事務所の始まりです。 ③『木曽川下流改修工事の昔話』（工学博士名井九介氏述）内務省名古屋土木出張所 1937 ※名井氏は、明治改修に携わった内務省の技師 →P23 「工事の施工」 ほぼ人力の工事であったことと、木曽川沿岸の住民による人夫であったことが記されています。 ④明治三十七年八月調『木曽川改修沿革』木曽川下流増補事務所（復刻版：木曽川下流事務所 2006） →「第八 人夫賃仕拂方法及び人夫総代」 人夫への賃金の支払い方法について記されています。
木曽川文庫 の所蔵	参考資料①～④

質問	宝暦治水の施工範囲が知りたい。
回答	木曾三川河口から桑原輪中（羽島市）の北端（約 60 k m）までの流域で、関係の村は、美濃・尾張・伊勢をあわせた 193 ヶ村に及ぶ広大な区域であったため、工区は一之手から四之手に区分されていました。 一之手 桑原輪中（岐阜県羽島市）から神明津輪中（愛知県稲沢市・愛西市）まで 二之手 梶島村（愛知県愛西市）から田代輪中（三重県木曽岬町）まで 三之手 墨俣輪中（岐阜県大垣市）から本阿弥輪中（岐阜県海津市）まで 四之手 金廻輪中（岐阜県海津市）から浜地藏（三重県桑名市）まで
参考資料	①『木曾三川歴史・文化の調査研究資料 宝暦治水 260 年記念特別号 KISSO』木曾三川歴史文化資料編集検討会/編 国土交通省中部地方整備局木曾川下流河川事務所調査課 2015 →P1～ 工事区域について記載されています。また、この資料は、宝暦治水全般についてまとめられています。 https://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/KISSO/pdf/kisso-VOLtokubetu2.pdf ②『木曾三川流域誌』木曾三川流域誌編集委員会・（社）中部建設協会/編 建設省中部地方建設局 1992→P317 「宝暦 4 年御手伝普請分分担工区」 ③『岐阜県治水史 上巻』岐阜県/編 合名会社大衆書房 1981 →P545～工区別に、場所・工事種類・その延長が記載されています。 ④『木曾三川治水史上の奇跡—宝暦治水の実像—』丸山幸太郎/著者発行 2017 →「宝暦 4～5 年実施の薩摩藩御手伝普請の全容」工事箇所は、当初計画 230 か所（実際は増加し 350 か所以上）として、一覧ではありませんが、工区での工事内容が詳細に記載されています。 ⑤壺之手勘定帳 [複製] ⑥二之手勘定帳 [複製] ⑦三之手勘定帳 [複製] ⑧四之手勘定帳 [複製]→⑤～⑧は、一～四之手の普請に必要であった材料・人足などの数とその内訳を詳細に記して幕府御勘定所へ報告した文書の写しです。 ⑨『川とともに生きてきたⅢ—東高木家文書にみる木曾三川流域の歴史・環境・技術—』名古屋大学附属図書館・附属図書館研究開発室/編集発行 2004 →P26 「三之手水行・定式・急破御普請出来形絵図」 ⑩木曾川下流河川事務所 HP 木曾川水系流域史ライブラリー「三之手小屋」 https://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/kisomaps/win/124/map.html
木曾川文庫の所蔵	参考資料①～⑨

質問	「道塚堤」の読み方が知りたい。
回答	読み方は「どうづかてい」です。 岐阜県美濃市の山崎大橋（県道 94 号線）から上流約 800m の長良川左岸堤が「道塚堤」と呼ばれていて、明治期の小俣川開墾事業で築堤された小俣川締切堤の部分です。
参考資料	①『わたしたちの美濃市』美濃市社会科副読本改訂編集委員会/編 美濃市教育委員会 1992 →P138 「道塚堤をつくった人」 フリガナあり ②木曾川下流河川事務所 HP KISSO「KISSO こぼれネタ VOL.50 美濃市特集」 →「道塚堤と小俣川開墾事業」 https://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/KISSO/kobore50.html ③『美濃市史 通史編 下巻』美濃市/編集発行 1980 →P339 「道塚堤防と小俣川開墾事業」
木曾川文庫 の所蔵	参考資料①・③

質問	木曽三川流域には水防建築は存在していましたか。 (水屋を紹介している資料やサイトはありますか。)
回答	木曽三川の下流域では、「水屋（みずや）」と呼ばれる、盛土をした上に生活物資を保存する倉庫を建て、洪水の際の避難場所にも兼用された建築物が多く存在していました。同様の建物が、利根川では「水塚（みづか・みずづか・みづか）」、淀川では「段蔵（だんぐら・だんくら）」と呼ばれていました。
参考資料	①『木曽三川流域誌』建設省中部地方建設局/発行 1992.3 →P84～89「輪中の生活」 ②『KISSO Vol.60』財団法人河川環境管理財団/編 国土交通省中部地方整備局木曽川下流河川事務所/発行 2006.10 →P12～14「水屋・水塚・段蔵－日本各地の防水建築－」 この作者は、語源的には「防水建築」の方が適切ではないかとの考えを持たれています。 https://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/KISSO/pdf/kisso-VOL60.pdf ③『西濃地方における水屋の形態』宇野春雄・内堀伸勇 1970 西濃地域の水屋の類型・間取り・創建年次・宅地や土地面積との関係等について実態調査をしたもの。 ④『輪中 その展開と構造』安藤萬壽男/編 1975 →P178～「水屋」 ⑤『輪中』伊藤安男・青木伸好 1987 →P76～「特異な景観-水屋建築」 水屋以外にも防水林としての屋敷森や他地域の水塚や段蔵（別名：乾蔵）などについても記載されています。 ⑥『大垣輪中調査報告書』大垣市教育委員会/発行 1988 →P8～21「輪中集落の立地と水屋建築」 大垣での水屋建築・水屋建築の消失・十六輪中の水屋について記されています。 ⑦『低湿地に立地した輪中の特質と輪中の教材化 -大垣市輪中館開設 30 周年を迎えて-』大垣輪中研究会/発行 2022 →P79～88 事例研究 3「(大垣の) 浅草輪中における堀田と水屋の調査」 H22 年に大垣市景観遺産に指定された釜笛の水屋郡の現状調査報告

	⑧『ふるさと 輪中と大垣』大垣輪中研究会 1983 →P12～22 特異な水屋建築 水屋分布図や市町村別水屋分布数（昭和 48 年 7 月調査）が記載されています。 ⑨『KISSO Vol.47』財団法人河川環境管理財団/編 国土交通省中部地方整備局木曽川下流河川事務所/発行 2003.7 →P7 水屋と助命壇 https://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/KISSO/pdf/kisso-VOL47_190826.pdf ⑩『KISSO Vol.135』木曽三川歴史文化資料編集検討会/編 国土交通省中部地方整備局木曽川下流河川事務所/発行 2025.7 →P3 木曽三川での水屋の北限地域の神戸町での水屋について記されています。 https://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/KISSO/pdf/kisso_VOL135.pdf 【木曽三川の水屋の紹介サイト】 ⑪kasen.net 日本の川 (http://www.kasen.net/river.htm) 木曽川水系の中で、長島・平田町の水屋が紹介されています。 ⑫大垣市 HP ○米山家水屋 (https://www.city.ogaki.lg.jp/0000019599.html) ○釜笛の水屋群 (https://www.city.ogaki.lg.jp/0000019571.html) ⑬公益社団法人 日本建築家協会 東海支部 機関紙「ARCHITECT」2012.9 「大垣と水の文化 第3回 輪中の生活文化水屋建築」 (http://www.jia-tokai.org/archive/sibu/architect/2012/09/mizu.html) 【見学可能な水屋】 ⑭木曽三川公園センター 水屋（輪中の農家） (https://www.kisosansenkoen.jp/~center/mkisosansenasobu_mizuya.html) ⑮輪中生活館（旧名和邸） (https://www.city.ogaki.lg.jp/0000000609.html)
木曽川文庫 の所蔵	参考資料①～⑩

質問	明治改修で佐屋川を埋め立てた理由は何ですか。
回答	木曽川からの土砂の堆積によって、水深が浅くなり、浚渫（川底の土砂を取り除く工事）等が行われましたが、川底への土砂堆積は止まらず、幕末には舟運にも支障をきたすようになっていました。そのため、明治改修で廃川となり埋め立てられました。
参考資料	①『KISSO Vol.82』木曽三川歴史文化資料編集検討会/編 木曽川下流河川事務所調査課 2012.4 →P3～「佐屋川河道の変遷」 佐屋川の始まりから廃川までと、その旧河道を利用した佐屋用水の整備、その後の木曽川用水への変遷。 https://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/KISSO/pdf/kisso-VOL82.pdf ②『木曽川は語る 川と人との関係史』木曽川文化研究会 2004 →P144～「佐屋川の開削から廃川まで」 ③木曽川下流河川事務所 HP KISSO「KISSO こぼれネタ VOL.30 祖父江町特集号」 →「佐屋川の廃川と敷地払い下げ」 https://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/KISSO/kobore30.html ④『KISSO Vol.73』国土交通省地方整備局木曽川下流河川事務所調査課/編発行 2010.1 →P3「筏川の用排水利用と木曽川用水」 佐屋川の旧可道の一部を利用して佐屋川用水が建設されました。木曽川用水の建設により、佐屋川用水は、廃止されましたが、跡地は木曽川用水の水路となっています。 https://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/KISSO/pdf/kisso-VOL73.pdf ⑤『KISSO Vol.65』財団法人河川環境管理財団/編 国土交通省地方整備局木曽川下流河川事務所 2008.1 →P12「佐屋川の流れと人々の生活」 佐屋川と人々との関り。佐屋川の廃川理由として、一般的な木曽川からの土砂堆積以外に、下流域での新田開発や明治時代になり渡船路としての佐屋川の意義が失われたことによる、人々との関係の変化があるのではないかという点が指摘されています。 https://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/KISSO/pdf/kisso-VOL65.pdf
木曽川文庫 の所蔵	参考資料①～⑤

質問	揖斐川の舟運、特に三湊についての資料はありますか。
回答	揖斐川の舟運は、昭和初期まで盛んで、川下からは、米・麦・塩・干物などを、川上からは、段木（つだ：燃料用の木）・石炭・木炭などが運ばれていました。 江戸時代、揖斐川の右岸、牧田川の合流地点あたりの「船附（ふなつ）・栗笠（くりがさ）・烏江（からすえ）」の川湊は、濃州三湊と呼ばれ、琵琶湖と伊勢湾を結ぶ最短コースに位置し、尾張藩によって保護・奨励されていたことから、非常に栄えていました。以下のような資料が木曽川文庫に所蔵されています。
参考資料	①『川と生きる 長良川・揖斐川ものがたり』久保田稔 2008.2 →P30～「揖斐川の舟運」 ②『揖斐川』揖斐郡教育会/編集発行 1979.3 →P73～「揖斐川の舟運」 ③『KISSO Vol.40』国土交通省地方整備局木曽川下流工事事務所/発行 2001.10 →P7～「揖斐川水系における水運の展開」 揖斐川水系での水運の始まりから、濃州三湊の繁栄及び大垣湊との争いとその衰退まで https://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/KISSO/pdf/kisso-VOL40.pdf ④『KISSO Vol.41』国土交通省地方整備局木曽川下流工事事務所/発行 2002.1 →P9～「木曽三川の水運を振り返って」 尾張藩が濃州三湊繁栄のための、木曽三川に領有する川湊から関ヶ原方面に陸送する荷は全てこの湊を経由するように指令していた。 https://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/KISSO/pdf/kisso-VOL41.pdf ⑤『KISSO Vol.89』木曽三川歴史文化資料編集検討会/編 国土交通省地方整備局木曽川下流河川事務所調査課/発行 2014.1 →P3～「美濃焼物の木曽川運送」 江戸時代末期、美濃焼の集積地であった多治見からの抜け荷のルート（番所をさける）として、濃州三湊で荷上げし、伊勢街道を中継して米原まで至る道筋があった。 https://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/KISSO/pdf/kisso-VOL89.pdf ⑥『KISSO Vol.103』木曽三川歴史文化資料編集検討会/編 国土交通省地方整備局木曽川下流河川事務所/発行 2017.7 →P3「関ヶ原は東西流通の要所」 濃州三湊と米原湊をつなぐ九里半街道（伊勢西街道：揖斐川と琵琶湖の最短ルート）が、藤古川から牧田川沿いに通っていた。 https://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/KISSO/pdf/kisso-VOL103.pdf
木曽川文庫 の所蔵	参考資料①～⑥

質問	木曽川の名前の由来は何ですか。
回答	河川の名称の由来には、流れている地域や川上（例：信濃の国から流れてくるなど）の地名や、川の特徴を表しているもの、神社仏閣に由来するものなどがあります。昔は、流れている地域毎に別名で呼ばれている場合が多かったのですが、明治に制定された河川法により原則、下流（河口）での呼び名に統一されました。 木曽川は、源流部の地域名の「木曽」が由来と考えられています。地名の「木曽」の由来には諸説あり、古い名称（主に地域毎の別名・鵜沼川など）も多くありました。
参考資料	①『木曽谷の歴史』平田利夫/編 木曽川下流河川事務所調査課 1999.10 →P23～「木曽の文字と語源」 「キノ」の文字：岐蘇・危村・吉蘇・吉祖・木曽 語源は、三説。 1) 産業説（純粹の意味の「キ（生）」と麻芋の古語「ソ」で、その地域で麻を植えて生芋（きそ）をつくり、布を織った） 2) 着衣説（着麻（きそ）又は着衣（きそ）） 3) アイヌ語説（川底が礫（こいし）で一面敷きつきられた美しい流れの意味） ②『木曽川は語る 川と人との関係史』木曽川文化研究会 2004 →P17「「木曽」の名前の由来」 語源は、5 説。 1) 原料説（生芋（きそ）から布を織った） 2) 産地説（木曽は、地に麻を産する） 3) 着衣説（麻布を着ていた） 4) 地形説（「刻む」の転化で「深く刻まれた溪谷の意味地名」） 5) アイヌ語説（急流で河床が礫で一面に敷き詰められた美しい川の意味） 古い名称：荻曽川・鵜沼川・広野川・墨俣川 ③『木曽三川治水のあゆみ』木曽三川治水百年のあゆみ編集委員会/編 建設省中部地方建設局 1995 →P5 「木曽川」 「木曽」の由来。木曽川と呼ばれるようになった時期（関ヶ原の戦い後に、尾張藩が木曽山を直領とし、運材のために全川を一括管理するようになってから） ④『郷土史にみる木曽川の流域史』中山雅麗 2002 →P3「木曽川の歴史過程」 古い名称：鵜沼川・広野河・尾張川・美濃川・起川 木曽川と呼ばれるようになった時期（天文 13（1544）年の書状・慶長 5（1600）年の朱印状）

	⑤『木祖村誌 源流の村の歴史（上）』木祖村誌編纂委員会 2001 P52～「木曾の荘園と文化」 「キソ」の発祥地について 吉蘇・小吉蘇（→荻曾村） ⑥『木曾川の流れ ―風土とその文学』新井正彦 1990 →P14～木曾川の美 木曾川の最上流部である味噌川の由来（その昔、木曾川は「曾川」と呼ばれていた。 今だ曾川にならざる川「未曾川」から「味噌川」）
木曾川文庫 の所蔵	参考資料①～⑥

質問	濃尾平野についての資料はありますか。 (犬山城の地形に関するテレビ番組を見て、もう少し詳しく知りたい)
回答	濃尾平野での「木曽三川の流路変遷について」を中心に『KISSO』の記事からご案内します。『KISSO』は、木曽川下流河川事務所 HP からご覧いただけます。
参考資料	【濃尾平野の形成と地形・河川】 ①『KISSO Vol.137 号』木曽三川歴史文化資料編集検討会/編 国土交通省地方整備局 木曽川下流河川事務所 2026.1 →P8「尾張平野の川と戦国のまち」 河川により運ばれた土砂により形成された濃尾平野の特徴と戦国時代にはその地形を生かした城や町づくりが行われていた内容。 https://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/KISSO/pdf/kisso_VOL137.pdf ②『KISSO Vol.114 号』木曽三川歴史文化資料編集検討会/編 国土交通省地方整備局 木曽川下流河川事務所 2020.3 →P8「木曽川のかつての流れと名残の川筋」 江戸初期以前の木曽川の派川の状況 www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/KISSO/pdf/kisso-VOL114_0326.pdf ③『KISSO Vol.59』財団法人河川環境管理財団/編 国土交通省地方整備局木曽川下流河川事務所 2006.7 →P12「濃尾平野の形成と河道変遷」 https://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/KISSO/pdf/kisso-VOL59.pdf ④『KISSO Vol.19』建設省中部地方建設局木曽川下流工事事務所/発行 1996.7 →P9「木曽三川の流路と輪中」 濃尾平野の地形と河川水路・輪中について https://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/KISSO/pdf/kisso-VOL19.pdf ⑤『KISSO Vol.129』木曽三川歴史文化資料編集検討会/編 国土交通省地方整備局木曽川下流河川事務所 2024.1 →P8「木曽川と川島～大河の流れと共に生きて～」 姿を変える木曽川

【木曽川扇状地】

- ⑥『KISSO Vol.90』木曽三川歴史文化資料編集検討会/編 国土交通省地方整備局木曽川下流河川事務所調査課 2014.3

→P8「木曽川扇状地と礫」

<https://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/KISSO/pdf/kisso-VOL90.pdf>

- ⑦『KISSO Vol.112』木曽三川歴史文化資料編集検討会/編 国土交通省地方整備局木曽川下流河川事務所 2019.10

→P1「犬山扇状地が育む守口大根の今昔」

犬山扇状地の概要

<https://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/KISSO/pdf/kisso-VOL112.pdf>

【犬山関係】

- ⑧『KISSO Vol.122』木曽三川歴史文化資料編集検討会/編 国土交通省地方整備局木曽川下流河川事務所 2022.3

→P8「入鹿切れ 人々を襲った災害の記憶」

小牧・春日井方面の台地開発のために築造された入鹿池で発生した災害

https://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/KISSO/pdf/kisso_VOL122.pdf

- ⑨『KISSO Vol.119』木曽三川歴史文化資料編集検討会/編 国土交通省地方整備局木曽川下流河川事務所 2021.7

→P8「天下分け目の木曽川水系」

木曽川水系での戦いが果たした役割を考察さしています。犬山城をめぐる攻防。

https://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/KISSO/pdf/kisso_VOL119_210806.pdf

【天正 14 年の大洪水による木曽川本川の移動】

- ⑩『KISSO Vol.59』財団法人河川環境管理財団/編 国土交通省地方整備局木曽川下流河川事務所 2006.7

→P8「国境を変えた木曽川可道の変化」

<https://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/KISSO/pdf/kisso-VOL59.pdf>

- ⑪『KISSO Vol.91』木曽三川歴史文化資料編集検討会/編 国土交通省地方整備局木曽川下流河川事務所調査課 2014.8

→P5「木曽三川下流域に影響した天正地震」

<https://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/KISSO/pdf/kisso-VOL91.pdf>

- ⑫『KISSO Vol.92』国土交通省地方整備局木曽川下流河川事務所調査課 2014.10

	→P5「木曽三川下流域の豪雨災害（一）木曽川の河道を替えた天正の洪水と今に伝わるヤロカの大水」 https://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/KISSO/pdf/kisso-VOL92.pdf 『KISSO』↓以下からバックナンバーが全巻閲覧できます。 (https://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/KISSO/index.html)
木曽川文庫 の所蔵	木曽川文庫に『KISSO』は全巻所蔵されています。